

『源氏物語』の構造

――〈玉鬘系〉物語の贈答歌をめぐって（中）――

西田 禎 元

（四） 〈玉鬘〉の物語

玉鬘は、葵上の兄である頭中将と夕顔の間に生まれた娘で、いわゆる〈玉鬘十帖〉のヒロインである。〈玉鬘系〉物語十六帖のうち、十二帖にわたって語られることから、その存在は重く大きい。

彼女の生い立ち、両親の物語において紹介される。

「帚木」の巻における〈雨夜の品定め〉の場面で、父親である頭中将の体験談の中で語られたのが最初である。

心に忘れずながら、消息などもせで久しくはべりしに、むげに思ひしをれて、心細かりければ、幼き者などもありしに、思ひわづらひて撫子の花を折りておこせたりし（一一―一五八ペ）^{（注一）}

ここに語られる「幼き者」こそ、当時二歳の玉鬘である。

母親の夕顔が頭中将に贈った歌の中でも、「撫子」（同前）と詠まれていた。この「撫子」は幼い玉鬘の呼称であり、他にも「大和撫子」（二五九ペ）とか「かの撫子」（同前）と記されている。

次いで「夕顔」の巻において、亡き夕顔を追憶する場面で、夕顔の侍女である右近と源氏との会話の中で語られる。

⑦ 幼き人まどはしたりと中将の愁へしは、さる人や（一一六〇ペ）

⑧ 一昨年の春ぞものしたまへりし。女にていとらうたげになん（同前）

⑨ 人にさとは知らせで、我に得させよ。あとはかなくいみじと思ふ御形見に、いと嬉しかるべくなん（同前）

⑩ 育まむに咎あるまじきを、そのあらん乳母などにも異さまに言ひなしてものせよかし（二六〇―二六一ペ）

㊦かの西の京にて生ひ出でたまはんは心苦しくなん。

はかばかしく扱ふ人なしとて、かしこになむ(二六一ペ)

㊦・㊧・㊨は源氏の言葉で、〈雨夜の品定め〉における
頭中将の体験談を思い出しながら、夕顔の形見として玉鬘
を引き取り育てたいと言う。

㊩・㊪は右近の言葉で、玉鬘の可愛らしさを語り、源
氏に引き取られるのであれば嬉しいと言う。

こうした二人の願望が、やがて十七年後の源氏と玉鬘の
邂逅を導き出す。〈玉鬘十帖〉の幕開けである。

源氏三十四歳・玉鬘二十歳の人生を語り起こす「玉鬘」
の巻も、冒頭の段は「夕顔」の巻に続く〈玉鬘成長譚〉で
ある。

㊫かの西の京にとまりし若君をだに、行く方も知らず、
ひとへにものを思ひつつみ(三一八二ペ)

㊬かの若君の四つになる年ぞ、筑紫へは行きける。(同前)

㊭若君をだにこそは、御形見に見たてまつらめ。(同前)

㊮いとうつくしう、ただ今から気高きよらなる御さ
ま〈中略〉幼き心地に母君を忘れず、をりをりに、

「母の御もとへ行くか」と問ひたまふ(八三三ペ)

㊯かしこに到り着きては、〈中略〉この君をかしづきも
のにて明かし暮らす。(八四ペ)

㊰には、玉鬘の行く方を捜しあぐねている右近の思い

が記されている。㊫には、玉鬘が夕顔の乳母と一緒に、
筑紫の太宰府に下向したこと、㊬には、夕顔の忘れ形見
として、玉鬘を養育しようという乳母の意志が、それぞれ
記されている。

㊭には、幼い玉鬘の美しさと、母親を恋慕う可憐な
さまが記されている。「きよら」という記述からも、玉鬘
のヒロイン性は明らかである。

㊮には、太宰府に着いてからの、乳母一家の玉鬘養育
の更なる決意が記されている。

こうして玉鬘は、若君から姫君へと成長してゆく。

㊯この君の十ばかりにもなりたまへるさまの、ゆゆし
きまでをかしげなる(八五ペ)

㊰この君ねびととのひたまふままに、母君よりもまさ
りてきよらに、〈中略〉品高くうつくしげなり。心ば
せおほどかにあらまほしうものしたまふ。(八六ペ)

㊱好いたる田舎人ども、心かけ消息がる、いと多かり。
ゆゆしくめざましくおほゆれば、誰も誰も聞き入れず。
(同前)

㊲二十ばかりになりたまふままに、生ひととのほりて、
いとあたらしくめでたし。(八七ペ)

㊳には、十歳頃の玉鬘の美しさが記され、㊴には、成
人した玉鬘の魅力が、〈きよら〉・〈品高し〉・〈うつくし〉

と強調される。すでに、㊦の幼少期の頃から、目立った魅力だったのである。母親譲りと思われる「心ばせのおほどかさ」も備わっていた。

この時期からは、『竹取物語』の〈かぐや姫〉を思わせる求婚譚もほめかされるが、発展するのは上京後の物語においてである。

さて、養父の太宰少貳が急死し、乳母一家は〈帰京〉という新たな人生のテーマの実現を祈願する。㊧の求婚譚序章を経て、㊨の玉鬘成長譚終章の時期である。

〈大夫監〉が登場するサスペンスが、やがて展開される。

大夫監とて、肥後国に族ひろくて、かしこにつけてはおぼえあり、勢いかめしき兵ありけり。むくつけき心の中に、いささか好きたる心まじりて、容貌ある女を集めて見むと思ひける。(八七―八八ペ)

好色な求婚者たちを避けるために、乳母たちは「いみじきかたはのあれば、人にも見せで尼になして」(八六ペ)と、玉鬘を不具者として言いふらしていたが、大夫監は、「いみじきかたはありとも、我は見隠して持たらむ」(八八ペ)と、玉鬘に求婚してきた。

監は先ず、亡き少貳の息子たち三人のうち、二人を味方に引き入れ、成婚に導こうと画策するが、長兄の豊後介は

父親の遺言を守り、玉鬘を上京させるつもりでいる。

一方、二人の娘たちは、監の勢力を恐れ、泣き惑うありさまである。

雅びやかでない監のありようは、「むくつけき」・「うとましく」・「荒らかなる」・「ゆゆしく」などと記されている。こうした監の求婚を、玉鬘はいかに受け止めていたのであろうか。

姫君の人知れず思いたるさまのいと心苦しくて、生きたらじ、と思ひ沈みたまへる(九三ペ)

この一文からは、監との結婚を死ぬほど忌み嫌っているさまがうかがえる。

さて、母親にせきたてられた豊後介は、母や下の妹の〈兵部君〉と共に、玉鬘に付き添い、都への旅を心に決めた。

胡の地の妻児をば虚しく棄て捐てつ(九五ペ)

といった、『白氏文集』新樂府の「縛戎人」をふまえた豊後介の物語が、併せ語られていることを付記しておきたい。

さて、夫や子供など、家族の多い上の妹は、筑紫にとどまった。別れの歌を、兵部君と玉鬘が詠う。

行くさきも見えぬ波路に舟出して風にまかする身こそ
浮きたれ(九四ペ)

兵部君の歌に和して応じた玉鬘の歌には、〈見えぬ波路〉・〈風まかせ〉・〈浮き身〉といった不安な心境が詠われ

ている。

こうして、玉鬘詠歌二十首の第一首が、松浦の地で詠み出された。

ところで、玉鬘の詠歌数二十首というのは、作中人物別詠歌数の第八位で、女君の中では、浮舟二十六首・紫上二十三首・明石君二十二首に次いで第四位となる。

浮舟は続篇〈宇治十帖〉のヒロインであり、紫上と明石君は正篇〈光源氏物語〉のヒロインと準ヒロインといつてよい。また後者の二人は〈六条院〉における春の御殿と冬の御殿の女主人でもある。

こうしたヒロインたちに並ぶ玉鬘の存在は重く、いわゆる〈玉鬘十帖〉、延いては〈玉鬘系物語〉におけるヒロインであることを示している。

それでは、玉鬘の詠歌の状況を、下に示そう。

詠歌のすべてが贈答歌であり、そのうち贈歌が三首、残りの十七首が答歌の様式である。

三歳で母親に死別し、養女としての人生がほとんどであった玉鬘のありようは、自分から相手にかかわるといったことはまれで、相手からのかかわりに対しての応答が大半なのである。答歌が多い所以である。

贈答相手別に見ると、養父の源氏が半数以上の十一首、次いで蛸兵部卿宮が三首、冷泉帝が二首となっている。

計	贈答相手						巻名
	冷泉帝	柏木	夕霧	蛸宮	光源氏	右近	
3					1	1	玉鬘音蝶 夏火分幸袴柱 上
0							
2					2		
3				2	1		
1					1		
1					1		
1					①		
1					①		
3		1	1	1			
4	2				2		
1					①		若菜
20	2	1	1	3	11	1	
							計

(○は贈歌である)

夕霧や柏木といった主要人物との贈答も見られるが、先の養母格であった少弐の妻や、新しい養母である紫上との贈答は見られず、そして何よりも実父内大臣(葵上の兄)との贈答もない。

どうやら玉鬘の物語は、源氏との父娘の物語、男女の物語が主たる内容であるようだ。

以下、少しく詳細に検討してみよう。

(1) 「初音」の巻に玉鬘の歌がないこと

豊後介たちに見守られ、無事に上京が叶った玉鬘は、長谷寺参籠の折りに、亡き母親の侍女で今は源氏に仕えている〈右近〉に再会し、やがて養女として源氏に引き取られる。

その翌年、六条院で新年を迎えた日々、玉鬘は源氏に案内され、紫上や明石姫君と対面するが、歌を詠むことはなかった。

「初音」の巻における詠歌は、源氏と紫上の贈答歌、明石母娘の贈答歌、源氏の独詠歌など六首に過ぎない。

〈玉鬘十帖〉の第二帖である「初音」の巻では、玉鬘の存在はまだ散文的で、和歌を伴った物語のヒロインとはなっていない。

「初音」の巻における玉鬘関係の記述は以下の三段である。

①西の対へ渡りたまふ。〈中略〉正身も、あなをかしげ、とふと見えて、山吹にもてはやしたまへる御容貌など、いと華やかに、〈中略〉隈なくにはひきさらしく、見まほしきさまぞしたまへる。〈中略〉いとものきよげに、ここかしこいとけざやかなるさましたまへる(三

一四一―一四二ペ)

年改まった元日の夕べ、源氏は六条院に住むご婦人たちのもとを訪れる。

夏の御殿に住む花散里を訪問した後、西の対に住む玉鬘を訪れた段である。

二十一歳になった玉鬘の魅力は、「をかしげ」・「華やかに」・「にはひきさらしく」・「さはらかに」・「ものきよげに」・「けざかなる」と語られる。

〔山吹〕^(注三)重ねの衣装が容貌に調和し、華やかな色つやが鮮やかに輝いているといった美しさである。玉鬘の魅力は、源氏の「男心」を刺激し始めていた。

②まして若やかなる上達部などは、思ふ心などものしたまひて、すずろに心げさうしたまひつつ、常の年よりもことなり。(二四六ペ)

年賀のために六条院を訪れる若い公卿たちは、新しい住人である美しい娘の存在に、心を緊張させるのである。

それまでの六条院には、源氏の夫人たちを除けば娘に相当する明石姫君・秋好中宮が住んでおり、姫君は八歳の少女、中宮は冷泉帝の後である。婚姻可能な女人は一人もいなかった。

準後宮ともいうべき六条院に、未婚の女性が唯一人存在しているゆえに、貴公子たちの心も騒ぐのであろう。

貴公子たちの主なメンバーは、蛸宮・夕霧・柏木・鬘

黒・左兵衛督（紫上の異母兄弟）などである。

③西の対の姫君は、寝殿の南の御方に渡りたまひて、こなたの姫君、御対面ありけり。上も一所におはしませば、御几帳ばかり隔てて聞こえたまふ。（二五二ペ）

正月十四日の〈男踏歌〉の最後の段階、踏歌の一行は、内裏・朱雀院に参上した後、六条院に移動した。日が改まつての夜明け方である。源氏をはじめ、御方々が準備を整え、夜通しで待っていた。

そうした折りに、玉鬘が春の御殿に渡り、明石姫君と養母の紫上に対面する。六条院に迎えられてから、二箇月余りが経っていた。

ともあれ、玉鬘をめぐる源氏や蛸宮や鬚黒との物語は、まだ本格的に始まっていない。「初音」の巻に、玉鬘の詠歌が見られない所以である。

第一帖「玉鬘」の巻に見られる源氏との贈答歌一首も、頭中将や夕顔と自分との縁をほめかす源氏の贈歌に対しての素朴な返歌であり、親に縁が薄い我が身を、〈数ならぬ身〉・〈憂き〉などと詠じていたに過ぎない。

(2) 玉鬘・蛸宮の物語

玉鬘と蛸宮の物語は、三組の贈答歌と、更に蛸宮からの贈歌一首によって構成される。

①なく声もきこえぬ虫の思ひだに人の消つにはきゆる
ものかは（「蛸」の巻、三一―一九三ペ）

②こゑはせで身をのみこがす蛸こそいふよりまさる思
ひなるらめ（同前）

③今日さへやひく人もなき水隠れに生ふるあやめのね
のみなかれん（一九六ペ）

④あらはれていとど浅くも見ゆるかなあやめもわかず
なかれけるねの（同前）

⑤朝日さすひかりを見ても玉笹の葉分の霜を消たずも
あらなむ（「藤袴」の巻、三一―三三六ペ）

⑥心もて光にむかふあふひだに朝おく霜をおのれやは
消つ（三三七ペ）

⑦深山木に羽翼うちかはしゐる鳥のまたなくねたき春
にもあるかな（「真木柱」の巻、三一―三七六ペ）

①と②は、有名な〈放蛸〉の場面における贈答歌である。

玉鬘を慕い訪れる蛸宮に、玉鬘の姿を見せようと企んだ源氏は、夕方から捕え集めておいた蛸を、玉鬘の几帳の帷子一枚上げて放ったのである。

寄りたまひて、御几帳の帷子を一重うちかけたまふにあはせて、さと光るもの、紙燭をさし出でたるか、とあきれたり。蛸を薄きかたに、この夕つ方いと多くつつみおきて、光をつつみ隠したまへりけるを、さりげ

なく、とかくひきつくろふやうにて。にはかにかく掲
焉に光れるに、あさましくて、扇をさし隠したまへる
かたはら目いとをかしげなり。〔中略〕えならぬ羅の
帷子の隙より見入れたまへるに、一間ばかり隔てたる
見わたしに、かくおぼえなき光のうちほのめくを、を
かしと見たまふ。ほどもなく紛らはして隠しつ。され
どほのかなる光、艶なる事のつまにもしつべく見ゆ。
ほのかなれど、そびやかに臥したまへりつる様体のを
かしかりつるを、飽かず思して、げにこの事御心にし
みにけり。〔螢〕の巻、三一―一九二―一九三ペ

『伊勢物語』における源至の〈雅び心〉を思わせるよう
な美的効果は心にくい。現代小説における『螢川』（宮本輝）
の末段も、『勢語』や『源語』を経た雅びな官能美に違
ない。

宮の贈歌は、螢の火に自分の思いの火をかけて、誰も消
せないと訴える。

玉鬘の返歌は、言葉に出して訴える宮よりも、身を焦が
す螢の思いの方が深いと切り返す。

螢の火（光）を題材にしての贈答歌である。

③と④は、〈あやめのね〉を題材にしての贈答歌であり、
宮の歌は、自分の思いを受けとめてくれる人がいないので、
声に出して泣けてしまうと訴える。

玉鬘の返歌は、分別もなく声に出して泣いて訴える宮の
思いは浅いと切り返す。

前歌同様、宮は言葉や声に出してしまう思いの告白であ
り、玉鬘はそうした思いの程を、浅く軽いと応ずる。

もつとも、こうした切り返しは、相聞歌贈答初期におけ
る常套手段であり、玉鬘の本心は少しづつ宮との交際を受
け入れようとするのである。

⑤と⑥は、一年余り後の贈答歌である。

この間、玉鬘の周辺では大きな変化が見られた。前年の
暮れの大原野行幸の際、冷泉帝の麗しい姿に接した玉鬘は、
源氏が勧める尚侍としての入内に心を動かす。

そして、入内を前にしての裳着の式が行われ、腰結の役
に当たった実父の内大臣と始めて対面したのである。

そうした状況を経ての時期であり、入内が一箇月後に迫
り、求婚者たちに焦りの色が見えていた。

鬘黒と螢宮と左衛兵督からの恋歌が届けられる。玉鬘は
螢宮だけに返歌した。

二人は、〈光〉・〈霜〉・〈消す〉などの言葉を共有しながら、
入内にとまなう〈別れ〉の現実を認めつつ、それでもお互
いの存在を忘れないと歌う。

天上への帰還に際して、〈帝〉だけに歌を託した〈かぐ
や姫〉のありようが偲ばれる段である。

かくして、〈玉鬘十帖〉最終帖が展叙されることになるが、意外にも、玉鬘は入内の直前に、〈弁のおもと〉の手引きで、鬘黒と結ばれてしまう。玉鬘自身が望んだ結婚でなかったとはいえ、冷泉帝の失望は大きかった。

年改まり参内した玉鬘のもとに、萤宮からの消息が届く。⑦の歌がそれである。

「深山木」(鬘黒)と「鳥」(玉鬘)を並べた歌であるが、「紅葉賀」の巻における「深山木」(頭中将)と「花」(源氏)の見立てが思い出される。

⑦の歌における見立てには、花や鳥がより素敵に咲き鳴く場としては、ふさわしいとはいえない、といった思いが吐露されてはいないだろうか。

萤宮の妬心が玉鬘に伝わり、彼女は「面赤みて、聞こえん方なく思ひゐたまへる」(三七六ペ)のである。

(3) 玉鬘・冷泉帝の物語

玉鬘と冷泉帝の物語は「行幸」の巻から始まる。

西の対の姫君も立ち出でたまへり。そこばくいどみ尽くしたまへる人の御容貌ありさまを見たまふに、帝の、赤色の御衣奉りてうるはしう動きなき御かたはら目に、なずらひきこゆべき人なし。(三一―二八二―二八三ペ)

源氏三十六年の十二月、冷泉帝の大原野行幸が行われた。

源氏は物忌で参列できなかったが、皇子をはじめ全公卿が随行した。

六条院の婦人たちにまじって、玉鬘も見物に出かけた。玉鬘の目に映った帝の魅力は、他の参列者に抜きん出た。常日頃目にしている源氏よりも立派であるともいう。

源氏の大臣の御顔ざまは、別物とも見えたまはぬを、思ひなしのいますこしいつかしう、かたじけなくめでたきなり。(二八三ペ)

こうした冷泉帝の魅力に接した玉鬘は、源氏が意図する宮仕えに心動かされる。

宮仕は心にもあらで見苦しきありさまにや、と思ひつつみたまふを、馴れ馴れしき筋などをばもて離れて、おほかたに仕うまつり御覧ぜられんは、をかしうもありなむかし、とぞ思ひ寄りたまうける。(二八四ペ)

源氏は玉鬘の裳着を急ぎ、実父の内大臣に腰結役を願い、玉鬘を養女とした件を話した。こうして父娘の対面が実現した経緯については、既に述べてきたところである。

亥の刻にて、入れたてまつりたまふ。(中略)すこし光見せて、をかしきほどにもてなしきこえたまへり。(三〇八ペ)

玉鬘・冷泉帝物語の後半は、「真木柱」の巻に展開される。思いがけなかった鬘黒と玉鬘の結婚に失望した冷泉帝

は、それでも女官としての出仕を望んだ。

内裏にも聞こしめしてけり。「口惜しう、宿世異なりける人なれど、さ思しし本意もあるを。宮仕など、かけかけしき筋ならばこそは、思ひ絶えたまはめ」などのたまはせけり。(三十三四三―三四四ペ)

玉鬘は尚侍として出仕した。その局に帝がお渡りになる。帝を拝する玉鬘の心のうちは、〈行幸〉の折りと変わらず、源氏と並べて賞讃する。

一方、冷泉帝は、期待に反した恨みごとを述べ、歌を贈る。

① などでかくはひあひがたき紫をこころに深く思ひそめけむ (三七七ペ)

「はひあひがたき紫」とは、紫色の媒染として用いる〈灰〉と〈紫〉の調合がむずかしいように、逢うことが困難な紫色の衣装(玉鬘の官位による)の人であるという意であろう。玉鬘の返歌は以下のようなものである。

② いかならん色とも知らぬ紫をこころしてこそ人はそめけれ (同前)

帝の恩寵に対して感謝の思いを告げたのであるが、冷泉帝は、父源氏にも似た「むづかしき世の癖」(三七八ペ)を示すのである。

事態の悪化を危惧した玉鬘は、父内大臣の配慮もあって、

自邸への退出を許可された。

未練が増す帝、一刻も早く退出をと願う夫の鬘黒、かくして、鬘黒の護衛の騒ぎに対し、帝は腹立たしくさえ思う。別れの歌が詠まれた。

③ 九重にかすみへだてば梅の花ただかばかりも匂ひこじとや (三七九ペ)

「九重にかすみへだてば」とは、幾重にも隔てている鬘黒の護衛のさまを詠じている。

帝と夫との間で玉鬘は悩み、返歌を詠んだ。

④ かばかりは風にもつてよ花の枝に立ちならぶべきにほひなくとも (三八〇ペ)

〈にほひ〉はなくとも、〈かをり〉はお届けしようという。後宮のご夫人方の〈にほひやか〉さには立ち並ぶことができない(夫人という立場にはなれない)が、風の便りとしての〈かをり〉(近況のお知らせ)はお伝えしたいという意であろうか。

〈あはれ〉なる別れの場面である。

(4) 玉鬘・鬘黒大将の物語

〈玉鬘十帖〉の終巻「真木柱」において、玉鬘は鬘黒大将と結ばれたと語られる。

ほど経れど、いささかうちとけたる御気色もなく、思

はずにうき宿世なりけりと、思ひ入りたまへるさまの
たゆみなきを、いみじうつらしと思へど、おぼろけな
らぬ契りのほど、あはれにうれしく思ふ。(三―三四一
べ)

「うき宿世」と思う妻と、「おぼろけならぬ契り」と思う
夫との、心の隔たりは重い。

二人のかかわりは「胡蝶」の巻に遡る。鬚黒から玉鬘に
寄せられた懸想文に対する、源氏の感想が記される。

⑦右大将の、いとまめやかにことごとしきさましたる
人の、恋の山には孔子の倒れまねびつべき気色に愁へ
たるも、さる方にをかしと、みな見くらべたまふ(三
―一六八―一六九べ)

〈孔子の過ち〉と譬えられる、本来の鬚黒らしからぬ求
婚の歌は記されていない。

鬚黒に対する源氏の感想は、「蛭」の巻にも記される。

①右大将などをだに、心にくき人にすめるを、何ばか
りかはある、近きよすがにて見むは、飽かぬことにや
あらむ、と見たまへど、言にあらはしてもなたまはず。

(三―二〇〇べ)

玉鬘の婿として物足りない、と源氏は思う。玉鬘が受け
た鬚黒の印象も好くなかった。

⑨色黒く鬚がちに見えて、いと心づきなし。(「行幸」の巻、

三―二八四べ)

〈鬚黒〉という呼称は、この記述に由来する。

それでも、実直な鬚黒は、玉鬘の実父と弟が、内大臣と
近衛府の部下であることを知るや、〈外堀を埋めること〉・
〈馬を得る〉ことから、核心に迫ることにした。

⑤かの大臣もさやうになむおもふけて、大将のあなた
さまのたよりに気色ばみたりけるにも、答へたまひけ
る(「藤袴」の巻、三―三二八べ)

④大将は、この中将は同じ右の次将なれば、常に呼び
とりつつ、ねむごろに語らひ、大臣にも申させたまひ
けり。(三―三四べ)

夕霧から源氏への報告である⑤からは、鬚黒の内大臣
への働きかけがうかがわれる。また、④には部下の柏木
を通して、玉鬘との縁談を内大臣に依頼しているさまが記
されている。

源氏は依然として二人の結婚には不賛成で、玉鬘自身も
鬚黒に一首の返歌もしなかった。

ところで、鬚黒が玉鬘に贈った歌は、次の二首である。

①数ならばいとひもせまし長月に命をかくるほどぞはか
なき(三―三二六べ)

②心さへ空にみだれし雪もよにひとり冴えつるかたしき
の袖(「真木柱」の巻、三―三五八―三五九べ)

①は冷泉帝への出仕前の歌で、②は玉鬘を妻にした後の歌であるが、玉鬘の返歌はない。

②の場合などは、次に示すような、相も変わらぬ玉鬘の、拒否にも似たうちとけない態度を導いている。

尚侍の君、夜離れを何とも思されぬに、かく心ときめ
きしたまへるを見も入れたまはねば、御返りなし。

(三五九へ)

鬘黒が感取した玉鬘の心の程は、まさしく歌に詠まれていた「はかなき」・「かたしき」といった頼りなく侘びしいものであった。

こうして出発した夫婦の生活であったが、二人の間には、最終的に三男二女が生まれるのである。

尚侍の御腹に、故殿の御子は男三人、女二人なむおは
しける〔竹河〕の巻、五―五三へ)

〈玉鬘十帖〉の物語ではないが、玉鬘・鬘黒二人の後日譚であることに変わりはない。

こうしてみると、玉鬘・鬘黒大将物語は、一種の喜劇であるといえよう。

(5) 〈玉鬘十帖〉の主旨は、光源氏・玉鬘の物語であること

これまで、玉鬘にかかわる主要人物三人の物語を見てき

たが、螢宮も冷泉帝も求婚譚の主人公たり得ず、成婚譚のヒーロー鬘黒大将も、ヒロインからは一首の歌も返され、贈られていないといった有り様である。和歌を伴わない物語の主人公はあり得ない。

贈答歌の状況からいっても、〈玉鬘十帖〉は、光源氏と玉鬘の物語ということになる。

十帖全体における光源氏の詠歌の状況からも、そのことはうかがえる。

独詠	贈答		巻名
	相手	手	
玉鬘	①	③	①
末摘花	①	①	①
紫上	①	①	①
螢宮	①	①	①
花散里	①	①	①
冷泉帝	①	①	①
頭中将	①	①	①
独詠	①	①	①
1	1	1	1
3	1	1	1
12	2	1	1

(○は贈歌である)

全詠歌数二十二首のうち、玉鬘相手の詠歌が半数以上の

十二首を占め、そのうちの十首は贈歌である。

他には、同じ〈玉鬘系〉の人物である末摘花を相手に二首、紫上たち五人は一首ずつのみである。

源氏・玉鬘の二人が、詠歌数の半数以上にわたって、お互に贈答し合っていること自体、やはり〈玉鬘十帖〉の物語は、源氏と玉鬘の二人の世界を構成していると言わざるを得ない。

その詳細については、次号で述べることにしたい。

(注一) 『源氏物語』本文の引用は、日本古典文学全集〈小学館〉による。なお、歌数等については、同書の「源氏物語作中和歌一覽」を参考にした。

(注二) 夕顔の人となりを、〈いとあさましく柔らかに、おほどきて〉(「夕顔」の巻、一一二二七ペ)と記している。〈山吹〉と玉鬘のかかわりは、次のような記述からもうかがえる。

①曇りなく赤きに、山吹の花の細長は、かの西の対に奉れたまふ(「玉鬘」の巻、三一二九ペ)

②八重山吹の咲き乱れたる盛りに露のかかれる夕映えぞ、ふと思ひ出でらるる(「野分」の巻、三一二七二ペ)

③かを見つるさきざきの、桜、山吹といはば、これは藤の花とやいふべからむ(同前、二七六ペ)

(注四) 〈玉鬘十帖〉における、玉鬘の源氏相手の詠歌数は十首で、「若菜上」の巻の詠歌数を除いた残りの全詠歌

数十九首の半分を超えている。

(にしだ・ただゆき、本学教授)